

恥じて悦ぶ心

甲 「もつとはつきり言つてごらん下さい。どうしたと言うのですか。」

乙 「先生、私はあれほど喜ばしていただきましたのに、二三日前にふとしたことで私の悪い悪い暗い心か頭をもたげてきました。それから私は不安で不安でたまらなくなつてきました。み仏様は天上高く見え、私は地の底深く沈んでいる気がいたします。私には何もかもなくなつて、暗い私のみが残つたのです。」

甲 「あなたの悦び方は、何だか不安に見えていました。けれど一度はあなたの通つた道を通らなくてはならぬのです。長い間悩んだ者が如来の慈悲にふれた時、間違いやすいのは、悦びの感じをにぎつてその味わいをたよりにすることなのです。ですから、そうした感激がうすれてきた時、ほんとの様が見えてきます。」

乙 「私はどうすればいいのでしょうか。私こそその悦びの消えた者なのです。それを追おうとしてもだめなのです。」

甲 「あなたの悦びは消えるかも知れぬ。けれども消えたまわぬはみ仏です。」

乙 「でもそのみ仏は天上高く、私とかけはなれて見えます。」

甲 「ちがいます、ちがいます。それはあなたの頭で描いた概念です。幻です。」

乙 「それでは真のみ仏はいずこにいられます。ああ私はどうしましよう。」

甲 「あなたを救うみ仏様は、そのあなたが今、地の底におちているという、そのどん底に、あなたを抱いて苦しんでいられます。悦びを信仰の証にしようとして自力にうちていたあなたの迷いをみ仏の智慧光はまたも突き破つたではありませんか。」

乙 「それでは、この私の今の暗い心もみ仏様によつて見せていただいたのですか。信仰が壊れたのでなくて私の間違いが打ち壊されたのでございませぬか……ああ」

甲 「そうなのです。絶対他力、無条件のお救いですが、あなたの全部が如来のみ心のうちにあるのです。み仏のお力を妨げる何物がありませんようぞ。」

乙 「そうとはかねて聞いていましたけれど、今の私のありさまをはつきり見せつけられた上からは、ことさらにその言葉が魂の底にひびきこみます。」

甲 「あなたのその立つても座つてもいられぬ心までが、如来の道をあなたがたどるよう如来の勅命そのものではありませんか。み仏のみ心を知らせてもらいましよう。愚痴な心の奥底に、み仏は『何をそんなに疑うのだ、そのままがいい。親の心をなぜ疑うか』とささやいていなさるではないか。信じられるではありませんか。」

乙 「ありがとうございます、ありがとうございます。南無阿彌陀仏。」

甲 「あなたの善もみ仏をさまたげることではできません。自分の善が役にたつ世界では人は高慢になります。あなたの悪もみ仏をさまたげることではできません。悪人とも悪人とも下品下生の悪人と目覚めても、その悪を見て恥じて泣くかわりに、恥じてよろこぶのです。悪をたかぶることはおそろしいことです。悪を恥じてよろこべとはあなたにはわかりません。悪をはじる心と悪人を救いたもうお慈悲とが高い世界で統一された時、悪を恥じてよろこぶ心になるのです。」

乙 「わかりました。明るい胸になりました。どうした広い世界でございませう。」

甲 「その明るい心さえ用事はないのです。その心を握らぬように、ただ金剛のみ力のみ、ほんとです。では、講演でまたね。」